

会場の下見の話の続き。

照明の次は音響のことを考える。

まず、会場の広さを見て、マイクを使うか使わないかを決めなければならない。その前におおいそぎで書いておくが、語りは地声がいいのか、マイクを使っていいのかという問題がある…らしい。

「らしい」というのは、ぼくはそこに問題を感じていないから。

もちろん、ぼくも地声で届く範囲と思えばマイクは使わない。学校のふつうの教室なら当然、マイクはいらない。担任の先生と同じだ。

ただし、なにがなんでも地声がいいとは思っていない。

体育館のような広い空間なら当然マイクを使った方が聞きやすいに決まっている。語り手も不必要に声をはりあげなくてすむ。

昔のマイクはガーガーピーピーの雑音やハウリングや、いかにも「マイクを使っています」というのがバレバレの音質だった。

形も大きくて目立つし、語り手の口元を隠してしまっていただけなかった。だが、今のマイクは音質もいいし、胸につけるピンマイクは小さくて軽くてまったく目立たない。

音声を伝える技術は、以前より格段に進歩している。

だから、ぼくがつけるかつかないか迷うのは、教室よりは広いし、体育館よりは狭い部屋が会場というときだけだ。

東北の小さな町に住む友人からこんな話を聞いた。

自分の町の小学校に東京から、おはなしを語ってくれる人が来ることになった。

友人は語りに興味があったので、学校にお願いして生徒の後ろで聞かせてもらうことにした。

会場は体育館で生徒たちは床にペタンとすわっている。

語り手のおばあさんはいすにすわり、前には高さをあわせたスタンドマイクが置かれている。

で、いざ始まるとなったとき、おばあさんはマイクを持ち上げ「これ、なしでも聞こえますよね」とニコニコしながらいって、スタンドごと後ろにやってしまったのだそうだ。

そういうふうに親しみをこめて言われると、人はなかなか「いいえ」とは言えないものだ。

で、始まったらおばあさんの声は小さくて聞き取りにくく、友人はいらいらしっぱなしだったそうだ。

お話会で声が聞き取れないのは、ストレスだ。

というより、そもそもだめだろう。

楽しむどころではなくなってしまう。

どんないい話を用意していたとしても失敗と言うしかない。

この語り手の失敗の理由はふたつ考えられる。

ひとつは「聞く側の快適さ」よりも「語りは地声でするもの」という神話、もしくは「地声でいたい」という自分の希望の方を優先させたことだ。

この場合「なにを大事にするか」の順序の判断をあやまって、「みんなでものがたりを楽しむ場を作る」というせっかくの機会をつぶしてしまったことになる。

もうひとつは、単純に会場の広さと自分の声量のバランスを読みあやまり「これくらいなら聞こえるだろう」という判断ミスで、目の前のマイクスタンドを「じゃまだから」と片づけてしまった可能性だ。

これは生徒たちが入ってくる前に会場を見せてもらい、声をだして聞こえ具合を確かめていれば、たいてい見当がつく。

誰かに体育館の後ろに立ってもらい、「聞こえますか？」としゃべってみる。大きい声、ひそひそ声、いくつかパターンを試す。

で、少しでも危ういと思ったら、保険の意味でマイクを使用した方がいい。下見でテストしていれば、起きなかった失敗と言うことになる。

ちなみに、マイクのあるなしに関係なく、体育館は語りの場としては不向きだ。メリットは全員が一度に入ることだけで、あとは天井が高すぎるし、よぶんな空間が大きすぎる。声がどこまでも抜けていって、どうにも熱がこもらない。やはり体育館は体育をする場所なのだ。

逆に狭いところにぎっしり入るのはいい。

となりの子の笑いや、こわがる感じが伝染する。

みんながいっしょにものがたりを聞く喜びはそういうところにある。

そして、子どもはせまい空間につめこまれることをそんなにいやがらない。むしろキャーキャー言っておもしろがってくれる。

結論をいうとおはなし会の目的が、おはなしのすじを伝えることだとしたら体育館でもいい。

マイクで声が聞こえればいいのだから。

だが、おはなし会はものがたりを材料にしてみんなで楽しい時間を過ごす場だとしたら、それは聞きやすいだけでなく、居心地のいい場の方がいいに決まっている。

だからどこで語るかはとても重要になる。

学校との事前のうちあわせの時、ぼくは聞いてくれる学年と人数を尋ね、予定している場所も訊く。

図書室とか音楽室、多目的ホールなどといわれれば問題ないが体育館と言われたら「他に場所はありますか？」と、うかがう。

で、今書いた理由を述べると、場所を検討しなおしてくれることもある。

すると、ぐっとやりやすくなる。

だが、押し問答の結果「すみません。体育館しか全員が入れる場所が

ないんです」と言われたらどうするか？

ぼくは「わかりました」とひきうける。

あくまでも体育館はベストの場所ではない。

だが、まずはものがたりを聞いてもらう機会をあちこちに作るのが先決で

「体育館は語りには不向きですからやりません」と言い切っては進展がない。

次善だし、少々やりにくいとは思ってもがんばって子どもたちに楽しんでもらい、その様子を先生方にも見てもらって、すべて終わってから「次はもう少し小さい空間だったらもっと楽しめます」と改めて言えば、うんと説得力があがる。

次は特別教室になったり、学年をわけたり、なにか手を打ってくれるかもしれない。

ちなみに「マイクを使うような広いところで語りはしません。子どもたちには地の声のよさを味わってもらいたいです」ということをポリシーにしている人がいるのは知っている。

いいたいことはわかる。そうかもしれないとも思う。

だが、全体を見渡せば、自分のポリシーと心中してもいいことはなにもないのだ。